

# 福岡県立大学生ドイツ派遣に関わる事前調査報告

池田孝博\*

## I 緒言

現在、特定非営利活動法人田川市スポーツ協会において、独立行政法人日本スポーツ振興センター（JSC）のポストスポーツ・フォー・トゥモロー推進事業再委託事業である「スポーツ国際交流を通じた共生社会推進事業」を活用して、2023年度および2024年度に福岡県立大学（以下、「本学」という）の学生を、障がい者スポーツの先進国のひとつであるドイツに派遣することが計画されている。さらに、本学に対して、その関係者による事前調査に、筆者を派遣するよう要請があったため、学長と相談の上、同行することを決定した。事前調査は、2022年12月3日から10日までの予定であったが、帰路における航空便のトラブルで、実際には11日に帰国することとなった。日本からの同行者は、市役所職員3名、田川市スポーツ協会職員1名、田川市社会福祉協議会職員1名で、現地にて、福岡県の欧州ビジネスコーディネーターとして業務委託をされているウエノ・コンサルトの社員1名が加わった。当初の計画から大幅に変更された実際の事前調査の行程は表1に示すとおりである。今回の事前視察に関する本学に

おける目的は、①学生の派遣先としての適切性（地域の安全性、移動の利便性を含む）、②計画されている派遣プログラムの教育的意義、③派遣プログラムの運営体制についての確認であった。本稿では、この事前調査において確認された、これらの事項について報告する。

## II エスリンゲン市について

都市の正式名称は、Esslingen am Neckar（ネッカー河畔のエスリンゲン）である。図1に、エスリンゲン市観光局が発行する市街地図を示している。エスリンゲン市は、バーデン＝ヴュルテンベルク州の首都であるシュトゥットガルト市の中心から南東約10kmに位置し、人口92,000人の都市である。町の南側にはネッカー川（写真1、地図の左下）が流れ、市街地には川からつながる運河（写真12、13）が通っている。市の公式観光ガイドによると、2度の世界大戦における戦火を免れたことにより、1000年以上前の建造物が残る旧市街地の街並みは目に美しく、ドイツの歴史や文化を感じることができる。

写真2～5はエスリンゲンの旧市街地を象徴

\* 福岡県立大学人間社会学部・教授

する街の風景や建築物である。街中には、建物の柱等、木枠がむき出しになった「骸骨屋敷」とゴシック調の建物が混在する。写真6は町の広場にある最も大きな教会（地図3）である。写真7は後述する表敬訪問を行った現市庁舎

（地図28）でその向かいに写真8の旧市庁舎がある（地図29）。また、写真9は裏側から見た旧市庁舎である。写真10はホテル近くにある塔（地図9）で、その隣に我々が宿泊したホテル（Hotel am Schrlztor 写真11）がある。写真

表1 福岡県立大学生ドイツ派遣事前調査の行程表

月日	時刻等	内容	訪問地
12月	6:00 (日本時間)	・福岡空港集合	羽田、フランクフルト空港経由
3日	23:00 (現地時間)	・シュトゥットガルト空港着	ホテル・アム・シュルツトール
	24:00	・エスリンゲン市到着	(Hotel am Schrlztor)
4日	a.m.	・市観光局のガイドによる市内散策	エスリンゲン市内
	p.m.	・旧市街の建造物、運河等を見学	
5日	a.m.	・エスリンゲンMathias Klopfer市長を表敬訪問、国際交流担当秘書官と面会	エスリンゲン市役所庁舎
	p.m.	・エスリンゲン大学のキャンパス散策 ・総合スポーツ施設の見学	エスリンゲン大学 ES Sports Park
6日	6:30	・部局長会議 (Zoom) 参加	
	a.m.	・シュトゥットガルトへ移動	
	p.m.	・在ミュンヘン日本総領事館副領事の戸田景子氏、名誉領事事務所の山越クリスティアーナ氏を表敬訪問	在シュトゥットガルト日本国名誉領事事務所
		・Dual Hochschule Baden-Wurtembergを訪問し、健康科学部・学部長Anke Simon教授による大学紹介	シュトゥットガルト市DHBWキャンパス
		・市郊外のスポーツクラブで活動するブラインドサッカーチームの練習を見学	MTV Stuttgart
7日	5:30	・心理コース人事面接 (Zoom) 参加	
	a.m.	・特別支援学校の施設見学および職員との共生社会に関する意見交換会	Rohrackererschulzentrum (ローアエッカ特別支援学校)
	p.m.	・InklusivSportsCamp2002に関する情報提供 ・国際青少年ボランティアの体験談の聴講 ・シッティング・バレーボールクラブの練習見学・体験 (交流試合)	ES Sports Park
8日	5:30	・教育研究協議会 (zoom) 参加 ・認知症高齢者のための福祉施設を訪問	福祉団体Malteser (マルテューザー)
	p.m.	・上記施設利用者とのレクリエーション交流 ・Dr. Sven Fries (スヴァン・フリース氏) による都市開発およびスポーツインフラ開発に関するレクチャー ・インクルーシブ・サッカーチームの練習見学・体験 (交流試合) ・車いすフェンシングの練習見学	ES Sports Park ES Sports Park
9日	a.m.	・チェックアウト	
	20:00	・シュトゥットガルト空港に移動	
	21:00	・18:50発予定の便が航空会社の都合で遅延 ・フランクフルト空港着 20:45発の羽田行は既に離陸 ・空港近くのホテルに宿泊	
10日	13:30	・振替便でフランクフルト発	
11日	10:30 (日本時間)	・羽田空港着	
	12:30	・羽田空港発	
	14:35	・福岡空港着	

14はエスリンゲン中央駅（地図の左下）で、隣接してエスリンゲンのバスセンター（写真15）が位置し、交通のアクセスが良い。

エスリンゲンの旧市街には運河を利用した水車小屋（写真16）があり、写真右上の2階の幼稚園で消費される電力は、この水車による水力発電で賄われているとのことであった。キャンパスを散策したエスリンゲン大学の校舎の壁や屋根は太陽光パネルで敷き詰められており、ドイツのエネルギーに対する考え方的一端を垣間見た気がした。

### Ⅲ 研修プログラムについて

#### 1. 施設等

##### 1) 総合スポーツ施設：ES Sports Park

敷地内には天然芝（写真17）と人工芝のサッカー場、直線100m以上、数コースのターントラック、子どもが遊べる遊具が配置された庭（写真18）、観客席のついたバスケットコートが3面とれるSporthalle（大競技場）（写真19）、区切り可能な中規模の広さのGymnastik（小競技場）が2部屋（写真20）、ロッカールーム、シャワールーム、いくつものミーティングルームなどが完備された総合体育館（写真21）、テニスコート等が配置されている。施設内の案内板やエレベーターのボタンの点字表記、音声アナウンスによる誘導など、障がい者にも配慮された設備が整っている。土地と建物はエスリンゲン市が設置し、当初は市が運営していたが、現在の管理運営は市の委託を受けて、そのセクションを使用する団体クラブが行っている。

都市開発およびスポーツインフラの開発に関するレクチャーにおいては、都市計画事務所の社長で、ES Sports Parkで活動するサッカー

チームFCエスリンゲンの代表でもあるDr. Sven Fries（スヴァン・フリース氏）から、スポーツパークの建設（リニューアル）に際して行った、利用者（団体、クラブ）の使用目的、競技特性など、参加者・利用者との共通概念を構築する手法など、誰にとっても使いやすい施設づくりのプロセスが紹介された。また、その中では、資金の調達の重要性が強調され、一つの手法として政治への働きかけについても言及された。さらに、利用者のニーズに応じて建設され、日本では見かけない特徴的な施設の一つとして「屋外体育館」（写真22）が紹介された。具体的には人工芝が敷き詰められたハンドボールコートぐらいの大きさで、屋根と柱、四方は大人の腰から胸ぐらいの高さの壁で覆われた施設である。一見雨天時や冬の利用を意図してのものかと思われたが、実際は、夏に日陰でスポーツができることをコンセプトとしてつくられた施設とのことであった。フリース氏によれば、このような考え方は、都市計画事務所による街づくりの手法の応用で、住民参加型の都市計画では「街区」（歴史、住民感情、生活圈等に基づいて構成されるエリア。距離・面積や人口など量的概念ではない）の中での会話、コミュニケーションを通して、年齢層や要介護者など様々な立場の意見を集約し、「誰にとっても、どのような立場の人にとっても過ごしやすい街づくり」が実現していると説明があった。話を聞く中で、この考え方は、本事業のテーマである共生社会の実現、そのものであるとの印象を持った。

余談であるが、ES Sports Parkに歩いて向かう途中、ベンツ社の工場を通りかかり、社員とその子どものために敷地内に設置された、保育所（写真23）、遊具公園、グラウンド、ハン

ドボールコート、天然芝のサッカー場、体育館を外から見学した。

これらの施設から、世界的大企業とそれを有する地域ならではの財政基盤を背景とした、市民および社員のための厚生施設が素晴らしく充実していることを実感するとともに、共生社会の実現に向けた社会全体の姿勢が強く感じられた。

## 2) 特別支援学校：Rohrackersschulzentrum

エスリンゲン郡立ローアエッカ特別支援学校・相談インター（写真24）を見学し、学校職員と共生社会に関する意見交換を行った。この学校は、子どもの障害に応じた8つのセクションから構成される。その内のいくつかを、シュミット校長の案内で見学した。児童・生徒は、小学1年生から高校3年生まで約220名（別途幼稚部も併設）が在籍している。それに対して常勤・非常勤職員含め、教師、看護師、PT、OT、言語療法士および事務職員など約400名のスタッフでサポートしている。子どもの身体症状に応じてそれをサポートする高度な機能を有する福祉機器（北欧製）、工夫された教材、広々とした戸外エリア、音楽室、工作室、体育館（バレーコート3面分、カーテンのような仕切りが可能）、年中使用可能なプール（温水ではないが暖房付き、底床の上下動が可能）、調理室、各種検査室、学生食堂等、施設設備が充実し、児童生徒のために配慮された素晴らしい教育環境が整備されている。また、どのセクションの教室でも、年齢や障がいの程度に応じて適切な児童数とそれを支援する教員数が配置されている。

シュミット校長によれば、当該施設はドイツ国内でも1, 2を争うほどのモデルとなる特別

支援学校であり、これが国内のスタンダードではないことを強調された。これらの環境や人件費を賄うための費用は基本的には地方自治体（郡）の予算であるが、政治家や様々な障がい者支援団体の援助の下、国およびEUからの多額の補助金を獲得している。その一方で、教育の質の確保のため、すべての入学希望者の入学は認められず、支援の必要性などについて厳しい審査や手続きがあり、入学へのハードルが高いことにも言及された。教育として学校内で支援すること以外にも、個人・家庭に応じた公的援助を受けるための方法についても支援が行われている。学校の目的は、児童生徒の卒業時の自立、社会参加であり、高学年では職業訓練に多くの時間が割かれる。また、中学生に相当する7～9年生の間に進路についてのサポートを行い、社会人として卒業させるか、高校に進学するかが決定される。

訪問しての印象は、施設だけでなく、説明対応に当たったどのセクションの責任者も礼儀正しく、丁寧で人間的魅力を感じた。見学後のミーティングルームでの共生社会に関する意見交換の中で、最も印象に残ったこととして、ドイツにおいても「インクルーシブ教育」と称して、健常者と障がい者が同じ教室で教育を受けるといった考え方やその実現に向けた運動があり、実際にそのようなプログラムが開設されたこともあるが、どちらの立場の児童生徒及びその保護者にもニーズが少なく、廃止に至ったという逸話が紹介された。その上で、校長自身やこの学校が考える共生社会とは、障がいを持つ子どもたちが、自己の機能を維持・回復し、社会で自立するための職業的スキルを身に付けることによって、卒業後に健常者と共に生きて行ける社会であり、この学校の教育の使命は、それ

を実現するための準備段階として、それぞれの子どもに応じた特別なメニューを用意して必要な支援することであると述べられた。

### 3) 高齢者福祉施設: Malteser (マルテザー)

福祉団体マルテザーがドイツ国内で展開する施設の一つである(写真25)。施設責任者ゾーゲレさんの説明によると、当該団体は、11世紀のキリスト教を他宗教から守るための宗教防衛団Malteserに由来する団体で、この思想を展開させ、現在はドイツ各地で福祉事業を行っているとのこと。ES Sports Parkに隣接するこの施設では、認知症の高齢者を対象にデイケアサービスを行っている。ドイツにおいても高齢者の認知症は社会問題で、差別や偏見を生じさせている。当該施設は、本人は勿論家族のサポートも含めたサービスを提供している。認知症の発症によって、社会から孤立し、友人や仕事を失うため、施設内では、料理、運動やガーデニング、絵画などの創作活動等、日常的な生活を送る工夫がなされている。施設の究極の目標は自立の支援である。症状の進行を遅らせるための対応の仕方やソフトとハードの両面からの生活デザイン等、具体的な工夫について紹介された。当該施設は、専任の職員のほか、ボランティアで運営されているが、介護人材の不足が深刻な社会問題であり、日本とも共通するこのような課題について、相互に意見交換を行った。その後、施設利用者のこの日のプログラムであるES Sports Parkまでの散歩に併せて、我々も移動し、そこで実践されている軽運動のレクリエーションに参加した。

## 2. インクルーシブ・スポーツ

### 1) ブラインド・サッカー

シュトゥットガルト市郊外にあるスポーツクラブMTV Stuttgart訪問し、クラブ内の団体の一つである、ブラインドサッカーチームの練習風景を人工芝の屋外サッカー場で約1時間見学した(写真26)。国際的に活躍する選手から、この日に初めて体験に来た子どもまで、10名程度のメンバーで活動しており、本当に目が見えないのかと思えるようなプレーの数々を拝見し、感動を覚えた。実際に、目を閉じて音を頼りにボールをコントロールしながら移動してみたが、極めて難しいパフォーマンスであった。初心者の子どもの練習を見ながら、我々であれば視覚的に他人のプレーをとらえて、それを模倣して再現することが可能であるが、全盲あるいはそれに近い視覚障がい者にはそれができないため、なお一層困難な状況であることが予想された。

### 2) シッティング・バレー

ES Sports Parkで活動するシッティング・バレーボールクラブの練習を見学した。少しだけ体験する予定であったが、実際に練習に参加してルールの説明などを受ける中で、急遽視察メンバーチームとクラブで、1セット25点マッチを行うことになった(写真27)。クラブメンバーの年齢層は、57歳から60歳後半ぐらいまでで、義足の方も含まれるが、過去にバレーボール選手であったという健常者も在籍しており、障がいは限定されるものの、楽しくかつ激しい、インクルーシブ・スポーツであることを体感した。

### 3) インクルーシブ・サッカー

ES Sports Parkで活動する2つのサッカークラブ（FC Esslingen、TV Esslingen）が合同で組織しているのインクルーシブ・サッカーチームの活動を見学した。このチームは、Sports Park内の屋外体育館でトレーニングを行っている。この競技では、健常者と障がい者（主に知的障害と自閉症）が決められた構成で同一チームを形成して行う競技である。ここでも見学の予定が、練習に参加し、結局、ゲームで対戦することになった。障害を感じさせない、優れた激しいプレーに圧倒された。

### 4) 車いすフェンシング

ES Sports Park内のスポーツホール（日本という体育館）で行われている車いすフェンシングのトレーニングを見学した。8歳の子どもから、先に行われた欧州選手権で銅メダルを獲得した、ウクライナからの避難民の選手など数名が参加してトレーニングが行われていた。すぐ隣では立って行う通常のフェンシングのトレーニングも並行して行われていた。フェンシングと車いすフェンシングは、車いすやそれを固定する台座を除けば、同じ用具で競技が行われる。また、このように、同一空間で同じクラブメンバーとしてトレーニングが行われている様子から、ここでも共生社会におけるスポーツの在り方の一様相を体験した。

### 5) InklusportsCamp2002

InklusportsCampは、障がいの有無に関係なく、広く近隣の子どもたちを対象とした、障害者スポーツおよびそれに必要な車いす操作、車いすの人の救助や支援の方法について学ぶ催しである。YouTubeの映像で、2022年6

月に5日間の日程で開催されたイベントの概要を視聴したのち、内容についての説明を受けた。イベントは、ES Sports Parkで活動するSV Esslingen（総合型スポーツクラブ）とFCE（サッカークラブ）およびDie Diakonie Statten（教会系宗教団体の慈善活動）の共催であり、25名の参加者（うち1/3が障がい者）に対し、州、市、各種福祉支援団体、スポーツ競技団体、障害者スポーツ協会、福祉機器メーカー等の15団体が協賛し、その一つであるボルシェ社は1万ユーロの資金支援を行っている。このような様々な団体の連携によるインクルーシブなスポーツイベントは稀であり、素晴らしい取り組みと思われた。2023年度は100人規模の参加者を見込んでおり、開催時期も9月に変更されることであった。今回の視察は大学を代表して参加しているが、個人的意見として、2023年度の本学学生のエスリンゲン訪問をこのイベントの開催に併せて調整できないか、同行した田川市関係者及び現地でプログラム調整に当たるウェーナー氏に検討を依頼した。

## 3. その他のプログラム

### 1) エスリンゲン市長の表敬訪問

エスリンゲン市 Mathias Klopfer 市長及び国際交流担当秘書官を市庁舎に訪ね、面会した。田川市からの交流に向けた協力要請に対して、市からは、現在ウクライナからの難民（女性と子ども約3000人）の受け入れ対応に追われ、日本との交流に人員や財力を向ける余裕がないが、日本からの訪問は歓迎し、交流を否定するものではないので地域民間団体と繋ぐための窓口になることは可能であるとの返答があった。本学からは、田川市に位置する唯一の大学であり、田川市の企画が実現すれば、向こう2年間、

本学の学生がエスリンゲンを訪れ、様々な体験や共生社会の在り方を考える機会を得られることを期待しているとお伝えした。

## 2) 在シュトゥットガルト日本国名誉領事事務所の表敬訪問

シュトゥットガルト中央駅(写真28)に隣接する在シュトゥットガルト日本国名誉領事事務所を訪問し、在ミュンヘン日本総領事館の副領事である戸田景子氏と在シュトゥットガルト名誉領事事務所の山越クリスティアーネ氏と面会した。田川市からドイツ国内で文化交流を行うに際しての支援が要請された。これを受けて、戸田・山越両氏からは、現在日独で行われている青少年交流の事例が紹介され、田川市として必要があれば遠慮なく相談を受けるつもりと回答された。本学からは、田川市に位置する唯一の大学として、田川市が進める事業等で本学学生がドイツと交流する際の支援をお願いした。なお、写真29はウクライナから直通列車でこの駅に到着する避難民のための案内掲示である。エスリンゲン市長を表敬訪問した際のお話とともに、ドイツにとってロシアのウクライナ侵攻は、とても身近な出来事であることを痛感した。

## 3) Dual Hochschule Baden-Wuerttemberg (DHBW)

シュトゥットガルト市内のDHBWのキャンパス(写真30)を訪ね、健康科学部の学部長のAnke Simon教授と面会した。教授からは、当該大学を含めたBW州内9大学によるCooperative State Universityで進められているデュアル教育(実践と学びの両立)について説明を受けた。当該大学では、健康マネジメント

のための経営学、看護師・助産師の養成教育を行っており、そこで実施されているデュアル教育とは、学生が入学と同時に、協力企業から給料を受けて社員となり、会社(職種)に必要な知識技術を大学で学び、実社会(会社)に出て経験を積むというサイクルを繰り返すものである。入学生には、高校を卒業して直ぐの者と、有資格者で既に職務経験があるが、学びなおしとして、専門分野の理論や知識を深めることを目的に入学する社会人がいる。また、高卒資格を有しない者のために、モジュール(科目群)を単独で受講するコース(科目等履修生)も設けられている。社会人の場合は、選択するモジュールを受講後に修了試験を受けてライセンスを取得するか、試験は受けず参加証明書を受け取るかを選択できる。なお、参加証明書のみを受け取った後、改めて修了試験を受験しライセンスを取得することも可能である。クレジットはEU共通のECTSで、学部課程の卒業には210ECTSが必要である。大学院は、Field of study、Core modules、Research & Methodologyを柱として、①マネジメントとリーダーシップ(M.A.)、②ヘルス・プロフェッショナル職業教育(M.A.)、③クリニカル・プラクティス(M.Sc.)の3つの専攻が設置されている。大学院の授業料は高額であるため、企業(大手スーパー)の基金で賄われ、90ECTSが修了要件となる。日本でいうところのDPは、知識、社会人としての責任感、新しくかつ広い視野で物事を見られることが掲げられている。大学・大学院を通して退学者は10%程度と一般的な大学の30%よりも少ない。教育だけでなく、研究活動にも力を注ぎ、7年間で520万ユーロの研究補助金を獲得し、Health economy, Medicine, Nursing, Health professional, Politics

をテーマとした研究および研究指導が実践されている。

教育内容のみならず、研究活動および大学運営に関しても興味深い話が多く、個人的には将来本学と何らかの交流が行える可能性を感じた。

#### IV 総括

今回の事前視察の目的は、①学生の派遣先としての適切性（地域の安全性、移動の利便性を含む）、②計画されている派遣プログラムの教育的意義、③派遣プログラムの運営体制についての確認にあった。

まず、派遣先のエスリンゲンについては、ドイツのハブ空港の一つであるフランクフルト空港からのアクセスも良く、街中を散策した範囲において危険を感じることもなく、エスリンゲンの鉄道駅やバスターミナルへのアクセスも徒歩圏内で利便性の高さも感じられた。また、中世の面影が残る街並みは美しく、魅力的で、ドイツの歴史や文化に触れるには絶好のロケーションであった。街には、多様な人種の人々が生活し、我々日本人を特別視するような雰囲気も感じられなかった。さらに、ドイツ料理だけでなく、移民経営のイタリア料理、アジア料理（インド、タイ、ベトナム等）のレストランや軽食店が散見され、食事の面でも柔軟な対応が可能で、学生の派遣先として特に懸念されるような問題は感じられなかった。

次に、派遣プログラムについては、今回我々が視察した内容は、いずれも共生社会と障害者スポーツという派遣事業の趣旨に合致しており、これらを学生が体験することは有意義な学びとなることが予想された。特に、個人的に魅力を感じたのは、InkluSportCampである。

2023年の開催は9月の予定であり、大学としては、前期の授業期間中よりも、夏休み期間が望ましいため、田川市に再考を望みたい。

田川市全体としての学生派遣プログラムの運営体制については、未だ整っていないというのが率直な感想であった。大学として安心して学生を派遣するためには、今後本事業の計画性・実施条件について改めて検討して判断する必要があると思われる。

最後に、この事前視察に際し、ドイツ車いすフェンシング協会のウド&イラ夫妻（イラ氏はES Sports Parkの館長）には現地での視察プログラムの準備とともに、寒いドイツの地において心温まる歓迎と多大なるご支援をいただいた。ご夫妻は、2021年に開催されたTOKYOパラリンピックの前に本学を訪問して人間社会学部の教員および学生との交流を行っており、同競技の事前キャンプ地であった田川市と本学に強い思い入れをお持ちであることを改めて認識させられた。ご夫妻の本事業への貢献に心から感謝を申し上げたい。そして、この事前調査に筆者の同行を勧めてくださった田川市の関係者の皆様、さらには留守中の学内業務を補ってくださった本学関係者の皆様に心よりお礼を申し上げます。





図1 エスリンゲン市街地（エスリンゲン市観光局発行）



写真1 ネッカー川



写真2 旧市街地を象徴する建築物①



写真3 旧市街地を象徴する建築物②



写真4 旧市街地を象徴する建築物③



写真5 旧市街地を象徴する建築物④



写真6 旧市街地で最も大きい教会



写真7 現市庁舎



写真8 旧市庁舎（正面）



写真9 旧市庁舎（裏側）



写真10 ホテル近くの塔



写真11 宿泊したホテル



写真12 運河①



写真13 運河②



写真14 エスリンゲン中央駅



写真15 バスセンター



写真16 水車小屋（右上が幼稚園）



写真17 サッカー場



写真18 遊具のある庭



写真19 大競技場



写真20 小競技場



写真21 総合体育館



写真22 屋外体育館



写真23 ベンツ社の保育所



写真24 特別支援学校



写真25 高齢者福祉施設



写真26 ブラインド・サッカー



写真27 シットティング・バレー



写真28 シュトゥットガルト中央駅構内



写真29 ウクライナ避難民への案内板



写真30 DHBW

